

悪夢探偵

2007(平成19)年1月21日鑑賞(テアトル梅田)



監督・脚本・製作・撮影・美術・編集＝塚本晋也／原作＝塚本晋也『悪夢探偵』（角川文庫刊）／出演＝松田龍平／hitomi／安藤政信／大杉漣／原田芳雄／塚本晋也（ムービーアイ配給／2006年日本映画／106分）

……三池崇史監督と並ぶ奇才(?)、塚本晋也監督が放つ『悪夢探偵』は、夢と現実が入り混じる中で展開される奇想天外な世界……。注目はマラソンの高橋尚子の金メダル獲得に多大の貢献をした歌手 hitomi の抜擢。ロングヘアとミニスカ姿の他、極端なクローズアップに十分耐えうるその目の力に注目！ ところで夢の世界といえば、『悪夢探偵』と『パプリカ』、あなたはどちらが好き……？

久しぶりの塚本ワールドは……？

塚本晋也監督の描く独自の世界は、日本はもちろんいつも世界から注目され、この『悪夢探偵』も「世界各国からオファー殺到!!」「現時点で世界17ヶ国での公開が決定!!!」とのこと。彼は1989年の『鉄男』でローマ国際ファンタスティック映画祭グランプリ他多数を受賞したとのことだが、私が知っている塚本ワールドは『六月の蛇』（02年）（『シネマルーム3』359頁参照）と、5話のオムニバス映画の1つ『玉虫』（『シネマルーム7』314頁参照）。『玉虫』は全然つまらなかったが、『六月の蛇』は絶品！

『悪夢探偵』で彼は原作・製作・監督・脚本・撮影・美術・編集・出演の8役をこなしているが、スクリーン上に登場する彼の役は、奇妙なストーリーの中で自殺志願の男女からのケイタイを受けて、夢の中に入っていき「ヤツ」の役。特に後半、いくつかのシーンに登場する彼の演技力にも注目……？

1月13日の公開から既に1週間以上経ったのに、テアトル梅田の小さい方の劇

場ながら満席で、立ち見が出るほどの人気……。久しぶりに観た塚本ワールドを私なりに満喫したが……。

『悪夢探偵』 vs. 『パプリカ』

この『悪夢探偵』のテーマは夢、しかも悪夢。塚本晋也監督が着目したのは、人間なら誰もが体験するものの、その実態がよくわかっていない、現実の世界の裏側にあるもう1つの夢の世界。人はなぜ夢を見るのか？ 夢の中に現れる人物たちは一体誰なのか？ そして恐ろしい夢を見た時、人間はどんな反応を示すのか？ 極限状態になれば、人間は夢の中で自分を殺すことさえできるのか……？ そんな疑問は誰にでも浮かんでくるが、それを映画の中でトコトン突き詰めていくのが塚本ワールドの面白さ……。

同じように、「夢」に注目したのが『パプリカ』（06年）。これは夢の中に入り込んでいくことによって、精神科の治療を行う主人公パプリカを描いたもの。これは最新型のサイコセラピー機器「DC ミニ」が活躍する、きわめてIT色、デジタル色の強い世界（？）だったが、それに対し『悪夢探偵』は、松田龍平演ずる影沼京一が生身の身体で他人の夢の中に入り込んでいき、何らかの情報を引き出したり、誰かを救助したりするという、アナログ色の強い世界……。楽しい夢もあるから、そんな中に入り込むのはいいだろうが、悪夢の中ばかりに入り込む悪夢探偵・影沼京一はやはり大変……。

hitomi の抜擢は大正解！

『六月の蛇』がベネチア国際映画祭で審査員特別大賞他多数を受賞したのは、塚本ワールドにしては比較的わかりやすかったこと（？）と黒沢あすかの起用が大成功したこと……？

そういう視点で見ると、『悪夢探偵』における塚本ワールドは多少わかりにくい、自らの意思でキャリア組を捨て、現場に入ってきた女刑事、霧島慶子役に歌手のhitomiを抜擢したのは大正解！ このhitomiは、小室哲哉門下としてデビューし、マラソンの高橋尚子が練習の時いつも聴いていたという『LOVE 2000』を歌って大ヒットした、ロングヘアーのカッコいい歌手。最近あまり顔を見ない

と思っていたが、パンフレットを読むと、31枚目のシングルがテレビドラマ『弁護士のかず』の主題歌になったり、アルバム『LOVE CONCENT』をリリースしたりと活躍しているらしい……。

彼女がファッションリーダーとしても女性の注目を集めているのは、何といてもミニスカートから伸びるそのカッコいい足。現場の刑事がロングヘアーにミニスカートでは、実際の仕事はやりにくいと思うが、映像受けとしてはやはり最高！ ミニスカ刑事のカッコ良さとちょっと変わった個性そして何よりも特徴的な目の力を、映画初出演ながらいかんなく発揮しているのは、一流アーティスト特有の感性のおかげ……。

安藤政信は縁の下の力持ちに……

塚本晋也監督と同じような異才監督(?)として、三池崇史監督がいる。そして、松田龍平や安藤政信は、そんな両監督が使いたがる資質を持った俳優らしい……。もっとも、『46億年の恋』(06年)では、三池監督は松田龍平と安藤政信の2人を対等な主役として起用したが、『悪夢探偵』では、hitomiのウエイトが大きくなったためか、塚本監督は若宮刑事を演ずる安藤政信を、縁の下の力持ち的な役割に……。

安藤政信は本来すごく存在感のある俳優だが、この映画では霧島刑事から「若宮くん」と呼ばれる人のいい若手刑事役。そして、ベテランの関谷刑事(大杉漣)とコトあるごとに対立する霧島刑事を擁護するやさしい役柄とされているが、映画ではそんな人間ほど不幸が訪れるもの……? 自殺志願者が死の直前、ケイタイで連絡をとっていたのは一体ダレ……? そんな捜査を霧島刑事と共に続けていた若宮刑事が次の犠牲者になろうとは……?

プロローグでのガイダンス役を原田芳雄が……

『父と暮せば』(04年)での宮沢りえとの共演(二人芝居……?)が強く印象に残る名優原田芳雄が、この映画ではプロローグに登場し、「悪夢探偵」とは何者か、彼に何を依頼すれば何をやってくれるのか、その場合の悪夢探偵の苦労はどの程度なのか等々、この映画のテーマについてのガイダンス役をつとめている。

彼の役名は大石恵三だが、その名前自体は名優に対して失礼ながらどうでもいいもの……？

彼は家族から迫害を受け、そこから逃れようとしているのだが、家族の考え方を探るためには悪夢探偵に依頼する他なかったことを、名優らしい説得力を持って説明してくれる。そのこと自体はありがたい限りだが、残念ながら、その役割を果たし終わると、ご臨終……。

カメラワークと音響効果の功罪は……？

この映画を撮影した志田貴之は、『六月の蛇』以降の塚本作品にすべて参加しているとのこと。『六月の蛇』はしっかりとしたカメラワークが印象的だったが、この映画では「悪夢」の中でカメラが不安定に大きく揺れ続けるのが特徴。また、それに対応した音楽と音響効果がすごい。

したがって、当初登場する2人の自殺志願者のケースでその体験をさせられた観客は、その後若宮刑事の悪夢、そしてクライマックスとなる霧島刑事の悪夢においては、落ちつかずイライラした気持ちを悪夢を見ている本人と共有すること……。そういう意味では、カメラワークと音響の効果大だが、他方で観客が疲れることもたしか。したがって、その功罪は……？

なおカメラワークについては、hitomiの顔に対する極端なまでのクローズアップが再三再四登場するから、是非それに注目を……。ところで、そのクローズアップを観ながら何度も思ったのだが、hitomiって丸顔、それとも卵顔……？

2007(平成19)年1月22日記